

戊辰戦争後、会津の復興と発展に内外から貢献した先人たち

梯次郎と称し、字は子錫、韋軒と号した。丸山胤道の二男として若松城下に生まれた。兄の胤昌が家を継いだので、後に別家として秋月姓を称した。十歳で藩校日新館に入学するとともに、儒者の高津溜川について詩を学ぶ。秀才の誉れ高く、十九歳のとき江戸に出て藩儒牧原半陶に経学を学び、また松平謹次郎（慎斎）の麴溪書院

に入塾する。ここに五年間留学して、慎斎から大きな影響を受けた。更に幕府の昌平坂学問所書生寮に入り、ここには十年に及んだが、後には寮の舎長となって五人扶持を給されていた。安政三年（一八五六）西国諸藩を歴遊して、万延元年（一八六〇）に江戸に帰った。このときの見聞をまとめたものが『観光集』である。

広沢安任とともに 会薩同盟の成立に尽力

藩主容保が京都守護職に就任すると、広沢安任とともに藩の公用方を命じられ、藩主一行の上洛準備のため先に京都に入った。文久三年八月十三日の夜、胤永のもとに薩摩の高崎左太郎（正風）が訪ねてきた。胤永はとくに高崎を知っている訳ではなかったが、高崎の方は胤永を知っていたらしい。ともかくもこの二人のはたらきで「会薩同盟」が成立し、八月十八日の政変が成功したのであった。胤永は一時、蝦夷地の代官として、いわば左遷されていた時期もあったが、慶応三年（一八六七）に呼び戻されて京都に帰った。

戊辰戦争の際は軍事奉行添役として各地に出陣しているが、戦に加わったわけではない。しかし軍事面の担当者としては重い地位にあったため、戦後は戦争遂行の責任者の一人として重罪に問われたのである。会津藩が降伏開城するにあたって、手代木勝任とともに

に新政府軍の板垣退助のもとに赴き、その役目を果たしている。

戦後、猪苗代に謹慎していたところ、旧知の奥平謙輔（長州藩士）から手紙をもらったので、ひそかに謹慎所を抜け出して越後まで行って彼に会っている。この帰りに作ったのが有名な「北越潜行帰途の作」（戦後述懐）である。

小泉八雲をもって 「神のような人」と 評された

明治元年（一八六八）十二月、胤永は終身禁固の刑となって各地に移されたが、同五年正月特赦にあって自由の身となることができた。同年三月、新政府の左院少議事として出仕し、諸官を経たのち、同二十三年第五高等学校の教授となって熊本に赴任した。このとき同僚のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は胤永のことを「神のような人」と評したという。同二十八年に同校を退職し、晩年は東京に移住して同三十三年一月、七十七歳をもって病没した。

永胤 秋月

〔梯次郎〕

あきづき かずひさ（ていじろう）
文政7年～明治33年（1824～1900）



幕末でも活躍 明治の教育者

山本 覚馬

やまもと かくま

文政11年～明治25年（1828～1892）



明治維新の先覚者

名は良晴。通称は初め義衛。相応齋と号した。会津藩の砲術師範山本権八の長男。妹八重は後に新島襄の妻となる。

藩校日新館で学んで文武を修め、とくに長沼流の兵学に通じていた。嘉永六年（一八五三）林権助に伴われて江戸に上り、佐久間象山に洋式

砲術を学ぶとともに大木衷城に蘭学を学ぶ。安政三年（一八五六）帰藩して日新館内に新設された蘭学所の教授となり、軍事取調役兼大砲頭取として洋式の練兵をおこなう。その間、古い軍学者との軋轢はあったがひるむことなく、ついに火繩銃を廃して兵制兵器の洋化をはかった。元

明治八年、新島襄と同志社英学校開校、同志社大学設立

明治八年八月、新島と結社して

「私塾開業願」を京都府に差出し、十一月に同志社英学校を開校した。その後、京都府の顧問は解任されるが京都府議会の開設に伴い上京区より議員に選出され、第一回府議会で初代議長となる。また新島および同志社の新社員三名と会して「同志社社則四条目」（現在の「同志社寄付行為」）を制定する。ついで同志社大学設立発起人となり、設立集会において新島らと演説する。この外演説はしばしば行う。

五十八歳にしてキリスト教の洗礼をうける

明治十八年五十八歳にして時栄夫人とともに宣教師D・C・グリーンから洗礼を受ける。京都商工会議所会頭にも推されるが、これは程なく辞任。同二十三年新島の死により臨時総長となるが、同二十五年十二月、河原町三条上ルの自邸で永眠。六十五歳。同志社チャペルで葬儀が営まれ、洛東若王子山頂に埋葬された。

新島 八重

〔山本〕

にいじま（やまもと）やえ

弘化2年～昭和7年（1845～1932）



慶応四年八月二十三日朝、急を告げる鐘が打ち鳴らされる中、多数の婦女子に混って唯一人男装で七連発のスペンサー銃をかついで入城した女性がいる。山本八重、二十四歳。砲術師範役山本権八の娘である。兄覚馬は京都で軍事取締役兼大砲頭取として戦っていたが大坂で行衛不明、弟三郎は、鳥羽伏見の戦で戦死、その仇を討とうと覚悟の出立ちであった。その日敵は、土佐兵を先頭に北出丸周辺まで勢いにまかせ侵入してきたが、北出丸や本丸石塁から、また背後の伏兵郭から打ち出

幕末のジャンヌ・ダルク

される銃弾的確さに負傷者を多く出し退却、長期戦をやるむなくされる。その時城にいたのは少数の老人・子供・女子のみであったから、八重のスペンサー銃の腕前は勿論、砲術の知識や技能が大いに役立ったと思われる。籠城中も彼女は、食事作りや負傷者の看病のかたわら殿様に砲弾の構造について説明したり、夜襲に参加したり、夫、川崎尚之助（死別）を助けて小田山の

あすの夜はいつくの誰かながむらむら馴れし御城に残す月影

と歌を詠んでいるが、彼女の口惜しさと憤りがにじみ出ているように思える。敗戦後は米沢の知人宅を頼っていた八重達は、兄が京都府顧問として、政

西軍めがけて大砲をうったりと男まさりの活躍をしている。落城の夜、

同志社大学開設の新島襄と結婚

治・経済の指導的役割を果たしているのを知り、明治四年京都へ移った。翌年四月から「京都女紅場」の副舎長兼教導試補として勤め、英語学習にも力を入れ西洋文化の摂取に努めた。

明治八年十月、同志社大学開設者の新島襄と婚約。襄は、自我に目覚めた女性

としての八重を認め大切に、翌年一月に洗礼を受け同じ牧師の司式で翌日結婚式をあげた。襄三十二歳、八重三十歳の時である。その後は、襄を助け、襄の良き理解者としてキリスト教伝導や同志社大学発展のために内助の功を發揮した。

西洋流の生活をおくる八重に対して、非難の矢が向けられた時期もあったが、八重は、平然とそれを受け流し、自分流をつらぬいている。その強い信念、勇氣、行動力は、激しい戦争を生きた者の力強さを感じさせる。

明治二十三年一月二十三日、「グッドバイ、また会わん」の言葉を残して襄は四十八歳の生涯を閉じた。八重は、四十七歳であった。

その後の八重は、社会福祉活動に励み、日清、日露両戦争では、日赤の正社員として、篤志看護婦を率いて看護活動に従軍し、宝冠章や勲六等を授与されている。

晩年は茶事を楽しむ、郷里会津の女学生達に戊辰戦争のことを語り聞かせたり、大龍寺にある先祖の墓を整理し、自筆の墓標を立てたりしていたが、昭和七年二月に盛大な米寿の祝賀会が行われた四ヵ月後の六月十四日、急性胆のう炎がもとで永眠した。享年八十七歳。

山川 浩

[大蔵]

やまかわ ひろし (おおくら)
文政9年～明治36年 (1826～1904)



会津の知将。 彼岸獅子で入城

初め常盤、与七郎、大蔵と称す。号は屠童子など。父は尚江重固、祖父は兵衛重英。父が早くに没したため、もっぱら祖父の薫陶を受ける。家禄千石を継ぐ。文久三年(一八六三)京都に居る藩主に呼ばれ、翌年の禁門の変では

陣将神保内蔵助に従って京南竹田河原に陣を張り、また真木和泉守らを天王山に追いつめて討伐する。

慶応二年(一八六六)十月、樺太の境界議定のため幕府が露国に派遣する使節団の正使小出秀実(ひでよし)に随行し、

仏、独を経て露国に入る。翌年五月に帰国したが、この体験は浩に多くのものを学ばせた。戊辰戦争の際は日光口防守主任となって善戦した。この戦いでは敵将谷干城から注目され、後年陸軍々人となる契機となったのである。しかし、新政府軍が若松城下に迫ってきたため、浩のもとにすぐ城に戻る様急使が来たのだった。かといって城はずでに敵兵によって囲まれていた。そこで浩は戦さには関係のない小松の彼岸獅子を集め、これを先頭に笛太鼓を鳴らし、整然と入城した。寄せ集めの敵兵はただ唾然とするばかりだったが、城内では会津の彼岸獅子を誰もが知っていたのである。浩は家老に任命されて籠城戦の総指揮をとるが、ついに降伏となり、城池を新政府軍の軍監に引き渡し、藩主らに随行して東京に至る。

陸軍に入り
熊本鎮台に着任

斗南藩時代は執政から権大参事として藩務を処理したが、程なく廃藩置

県となった。明治六年(一八七三)陸軍に入り、少佐兼任裁判大主理として熊本鎮台に着任。反乱軍と戦う中、同七年左臂を敵弾が貫通する重傷を負い、以後は左腕が用をなさなくなった。同十三年、陸軍歩兵大佐となり、総務局制規課長兼東京師範学校長を務める。その翌月、さらに東京高等師範学校長、東京女子高等師範学校長をも兼ねる。そしてこの年(明治十九年)十二月には陸軍少将にのぼる。このとき長州出身の山県有朋が「かつて賊軍だった者を将官にするとは何ごと!」そう言うって激怒したと伝えられる。

勲功により 男爵に叙せられる

同二十三年には貴族院議員に任じられ、同三十一年一月には勲功により男爵となるが、二月に至って病勢が悪化し、その四日没したのである。享年五十四。浩は武人でありながら和歌に堪能であり、その著に『さへら山集』がある。

薩摩人みよや東の丈夫が さげはく太刀のときかにぶきか

その山川健次郎は、晩年風貌は巨眼炯々として会津武士の気迫があり、見るからに偉丈夫であったという。終生清廉潔白を旨とし、東京小石川の住居は、質素で田舎臭く別荘の様であったという。芸者が出る宴席には出ず、講演会に招かれても報酬は一切受け取らなかったという。相当の堅物だが、部下や学生達には親切で思い遣りが人一倍あったという。

大正十年頃、健次郎は友人の旧会津藩士根津嘉一郎と、郷里の飯盛山に墓参にきた。当時の白虎隊士墓地はさざえ堂の狭い東側に在った。嘉一郎の意見で飯盛山の西側に百八十五段の石段を創り、山上に白虎隊の墓碑を上げて多くの人が参拝出来る様にしたら如何かと云った。多くの寄付が集り、大正三年から石段工事が始まった。ところが東京朝日新聞主幹の杉村楚人冠が、健次郎に自然破壊だと嘯み付いた。その論戦は連日朝日新聞に掲載されたが、山川健次郎は「明日の日本を背負って起つ青少年の、真の武士道と愛国心を育てる為に墓地を整備していると云った。」世論は健次郎側に付き、論戦は終わった。石段は昭和三年に完成した。

山川 健次郎

やまかわ けんじろう
嘉永7年～昭和6年 (1854～1931)



東京帝国大学 総長

明治時代、大正時代、昭和初期と人々から「星座の人」と崇敬された、会津生れの人物が居る山川健次郎である。戊辰会津戦争後に、儒者秋月梯次郎の紹介で、山川健次郎と小川渉は、長州藩総督奥平謙介の保護を受けて、勉学の道に入った。

健次郎は、薩摩藩の黒田清隆の推

薦で、米国の名門エール大学に留学が出来た。彼は理工系学を修め博士号を取った。近くに妹の捨松が五人の少女と留学(本名咲子、母の魔除の捨松を本名とした)。兄妹は日本語を忘れない様に、日本語の文通で多くの時事や、外国文化、歴史等を吸収した。

明治八年(一六七五)日本に帰国。

文系の東京大学に、理工学部を創設して教授として活躍。明治の薩長閥政府の時代に二度も、会津生れの東京大学総長が活躍した。これは当時の政治的にも稀な事であった。この間、京都帝国大学や、九州帝国大学の総長を務めた。東北帝国大学の創立にも深く関与した。東京物理学校、現在の東京理科大学の創立に大きく貢献した。退官後は現・武蔵学園総裁、現・九州工業大学の初代総長も務めた。全国の学校を訪ねて、物理学や教育談義も行ったという。

山川健次郎は、日本初の東京大学物理学科の主任教授であり、湯川秀樹、朝永振一郎の日本物理学者達はみんな、山川健次郎の流れを汲み、有名な物理学者田中館愛橘や、長岡半太郎は直弟子であったという。

山川健次郎は、嘉永七年閏七月十七日、若松城下本二之丁に、奉行山川重固の参男として生まれた。(長男早世)次男、秀才の山川大蔵(浩)「幼名与七郎」とは八歳違い。然し、父が早く亡くなり、山川兄弟は祖父の家老兵衛に遅く育てられた。その山川家は、男勝りの女系家族であった。

彼は幼い頃から青瓢筆と比喩された。しかし十五歳で白虎士中二番隊に入ったが、規約改正で十六歳十七歳

大山 捨松

おおやま すてまつ

万延元年～大正8年（1860～1919）



鹿鳴館の華と謳われた

日本初の留学生として
アメリカに留学

会津藩家老山川家の末娘として誕生。幼名をさき（咲子とも）。戊辰戦争後、兄の山川浩らとともに斗南に移住。その後、函館の知人に預けられ、さらにフランス人に預けられた。

明治四年（一八七二）、明治政府が派遣する岩倉使節団に混じり、日本で最初の女子留学生の一人としてアメリカに留学。その際、母親は「娘のことは捨てたと思って、帰国を待つ（松）のみ」として「捨松」と改名している。

その頃、妻に先立たれ後妻を探していた薩摩藩出身の大山巖から結婚の申込があった。山川家では当然の如く反対したが、大山側が何度も説得にあたり次第に態度が軟化、本人次第ということになった。

捨松は、大山巖の大らかな人となりに触れ、また西洋文明に造詣が深かったこともあり、結婚を決意。明治十六年に結婚した。以来、おしどり夫婦であったという。

結婚後、捨松は留学で身に付けた英語力を生かし、社交界に出る。舞踏会でのステップ、長身から来るドレスの着こなし、センスの良さから外国人客を相手に活躍し、「鹿鳴館の華」と謳われた。

津田梅子が
女子英学校開学の際
顧問として就任

また、捨松は、女子教育にも力を入れていた。留学時に一緒にアメリカに渡った津田梅子が明治三十三年（一九〇〇）に女子英学塾（後の津田塾大学）を開学する際に尽力し、捨松は顧問として就任し、教師には、ホームステイ先で親友となったアリス・ベーコンを呼び寄せた。

大正五年（一九一六）夫・大山巖死去。

津田梅子が健康上の理由で塾長辞任の意思を表すと、塾の運営を取り仕切り、大正八年（一九一九）、後任の塾長を選任する。その就任を見届けて直ぐ、高熱に倒れそのまま逝去した。

飯沼 貞吉

いいぬま さだきち

嘉永7年～昭和6年（1854～1931）



自決から蘇生した 白虎隊士

飯沼貞吉は、飯沼家四五〇石の次男として生まれ、山川浩、健次郎兄弟らとは従兄弟関係にある。健次郎とは同年であるが、白虎

隊が編成される際に、一歳上の年齢を伝え入隊した。

中二番隊は松平容保の護衛として滝沢村に向かい、増援のため戸の口原に出陣した。ここで新政府軍と対峙したが、隊は散り散りになりながら退却を余儀なくされ、飯盛山までたどり着いた。

ここで白虎隊士は自刃を凶ったが、貞吉は唯一人蘇生。

電信技術を学び
技師として日本各地で勤務

その後、貞吉と改名し、電信技術を学び、工部省（後の通信省）に入省、電信技師として日本各地で勤務した。明治二十七年（一八九四）、日清戦争が勃発すると大本営付として従軍し、通信施設工事にあたった。その後、仙台通信管理局に勤務し東京―仙台間の直通電話回線の敷設などに功績を残した。



昭和43年、「会津若松市民憲章」を制定

明治戊辰100年を記念して市が制定した「市民憲章」は、平和・創造・繁栄の3つの誓いをたて、昭和43年5月3日（憲法記念日）に制定式が行われた。

- ◎親切をつくし住みよいまちをつくりましょう
- ◎きまりを守り明るいまちをつくりましょう
- ◎健康で働き豊かなまちをつくりましょう
- ◎環境をととのえ美しいまちをつくりましょう
- ◎自然と文化財とを愛しゆかしいまちをつくりましょう
- ◎教養を高め文化のまちをつくりましょう

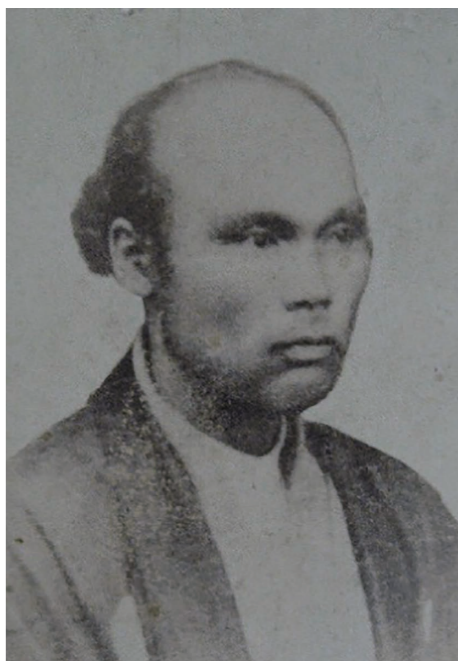
会津若松市民憲章

昭和43年5月3日制定

廣澤 安任

ひろさわ やすとう

天保元年～明治24年（1830～1891）



新しい青森県の生みの親

幕末に会津藩主松平容保が京都守護職を拝命した際、公用方として活躍し、戊辰戦争後は斗南へ移住し、開拓や旧藩士の救済にあたり、廃藩置県後は現在の青森県の基礎を作り、日本初の西洋式牧場を開設し、畜産・酪農の発展のために多大な貢献をした人である。

一八三〇年（天保元）二月二日会津藩士広沢庄助（七石五斗三人扶持）の次男として、現在の本町極楽寺の

北側で生まれた。通称富次郎、牧老人・六十九種草堂主人とも号した。兄は安連、通称富太郎。

幼い頃より秀才として知られ、一八五八年（安政五）藩名により江戸昌平塾に入学、後に舎長に就任。京都では公用方として在任中、人斬り新兵衛として名を馳せた田中新兵衛を逮捕、又、秋月梯次郎と共に諸藩を駆け回り、八・二八クーデターの謀議をまとめ上げた。尊攘派弾圧

のために時には自らも刀を抜き、新選組の近藤、土方たちと共に戦っている。

鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍が敗れた後、広沢は江戸に残り、あらゆる人脈を駆使して、会津藩に朝敵となる理由がないことを説き戦争回避の交渉を重ねていたが、西軍兵士に捕らえられ一八六八年（慶応四）四月から一年半余りを獄中で過ごし、会津戦争に参戦することは出来なかった。

一八六九年（明治二）九月には松平家の再興が許され、斗南にて三万石を賜った。

斗南藩では大参事（現在の副知事）の山川浩や少参事の安任らが藩の運営を担い、僅か三万石で家臣とその家族一万七千人が生活することは困難で、その救済や開拓の指導にあたる安任らの苦勞は並大抵なものではなかった。

一八七一年（明治四）七月には廃藩置県により「斗南県」となっていたが、斗南県小参事となった安任は困窮にあえぐ人々の救済策として、弘前県への吸収合併を画策し、八戸県大参事太田広城と両名で、弘前、黒石、斗南、七戸、八戸の5県合併を政府に建言した結果、合併による新たな

弘前県（後の青森県）の成立に至る。

この地に見切りをつけて去った人も大勢いたが安任は斗南移住を強く進言した一人としてこの地にとどまり自分の考えの正しさを証明する立場を取った。

洋式牧畜の手法を学び畜産業振興の基礎を作る

牧畜運営の構想を抱いていた安任は一八二七年（明治五）谷地頭（現三沢市）に開牧社を開き、ルノーとマルキンという2人のイギリス人を雇い、本格的な洋式牧畜の手法を学んだ。内国勸業博覧会では自分の牧場で育てた牛馬が龍紋賞を受賞している。

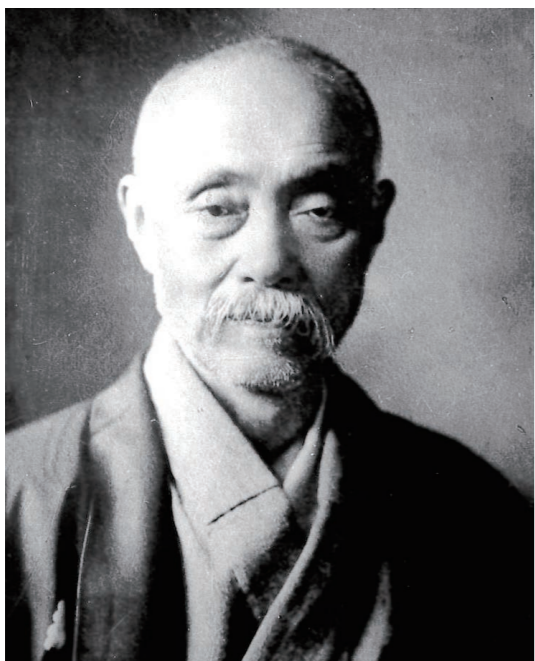
一八七六年（明治九）の明治天皇の東北巡幸の際には、牛馬数百頭をご覧いただき、雄大な牧場風景に大変感激され安任に賞金を与えられた。

一八九〇年（明治二三）に日本畜産協会を設立するなど畜産業振興の基礎作りをした安任だったが、翌年二月インフルエンザのため志半ばで東京にて死去、六十二歳。遺骨は青森県三沢市広沢牧場旧敷地内に葬られている。

秋山 清八

あきやま せいはち

嘉永元年～大正4年（1848～1915）



初代若松市長

動乱の戊辰戦争をめぐり抜け、市制となった若松の初代市長となり一生を郷里会津の復興に捧げ、会津中学校（現会津高校）の設立に尽力した人が秋山清八である。

清八は江戸時代末期の一八四八年（嘉永元）会津藩士秋山彦左衛門（御次番一〇〇石）の長男として若松の

新町三番丁（現材木町）に生まれた。南側の隣家は飯盛山で自刃した白虎隊士林八十治の生家である。

十歳で日新館に入り、十七歳の時藩主松平容保が京都守護職に任じられた際、別撰隊隊員となり鳥羽・伏見の戦いに参戦奮闘しその後、越後赤谷口（現新潟県新発田市）に転戦

十二年間の議員生活その間、岩越鉄道の若松乗り入れに尽力

一八七三年（明治六）若松に戻ると、マッチ製造会社を経営、一八八五年（明治十八）には福島県議員に初当選し、十二年間の議員生活の間に「鉄道なくして会津の発展はない」として岩越鉄道（現磐越西線）の若松乗り入れに尽力した。

一八九九年（明治三十二）初代若松市長に就任する。

その年には郡山―若松間に鉄道が敷かれ、輸送が確保出来たため会津漆器や会津清酒などの地場産業の販路が拡大し飛躍的に発展した。特に若松の生産高の多い会津清酒の将来性を予測した清八は東京の市場に御すことを勧め、会津清酒のブランドを中央に知らしめた。

人材育成のため中学校の設立に心血をそそぐ

清八が生涯を通して最も力を注いだのは中学校の設立だった。武士の時に味わった苦しい経験から、これからの会津にはいかに人材育成が大切か、そのために教育が重要であると考えたからである。

明治の初め頃、会津には高等教育機関はなかった。清八は私立として会津人の手による会津人のためになる中学校設立を目指し悪い足を引きずりながら各地を走り回り寄付金を集めた。磐梯山の噴火などもあって難航したが、山川浩や弟の健次郎などの会津出身者の有力者に働きかけたり、時の文部大臣榎本武揚の協力を得て、一八九〇年（明治二三）栄町（旧学鳳高校跡地）に待望の市立会津中学校を開校することができた。一九一五年（大正四）八月六日六十六歳で亡くなった時、清八には自宅の他に何の財産も残っていなかったという。

海老名 季昌

えびな すえまさ

天保14年～大正3年（1843～1914）



蝦夷（北海道）警備についていた父のもとに行き、戸切地御蔵屋敷において厳しい寒さを経験。時に十八歳。父の隠居によって二十歳で家督を継ぎ、勤番として京都へのぼり、禁門の変で戦功を立てて使番に進む。

会津藩最後の家老

慶応二年（一八六六）常詔の大砲組々頭となったが、パリ万国博覧会に出席する徳川昭武の随行人を命じられ、横山主税とともに翌年正月に横浜を出港してパリに赴く。万国博覧会を見学するともに会津藩の山川大蔵、田中茂手木らとも会い、その後、昭武一行と別れて横山とともに独、伊、英、露、蘭を巡って十二月に帰国している。翌年の正月鳥羽伏見の戦いに従軍したが右足に銃創を負ったため会津へ帰る。その後、奉行、若年寄を経て八月には会津藩最後の家老となる。

降伏開城後は各地で謹慎生活を送り、許されてからは斗南へ行くが、廃藩のため青森、山形の県属官となる。この頃に県令三島通庸に見出され、三方道路事件前後の

信夫郡や北会津郡の郡長として、自由民権派の人々と対立した。その後は警視庁の警部となったが二十五年に退職して会津に帰って来た。すると若松町長に推され、三十二年の市制施行に尽力。若松市長事務取扱、市会議員・学務委員等となり、復禄請願委員長、士族同志会長などに挙げられて功労があった。

若松基督教会員として伝道に尽力した

妻のリンは幼児教育、女子教育者としてその名が高く、私立若松幼稚園（後学校法人）、私立若松女学校（後の県立会津女子高校）を創立。また熱心なクリスチャンでもあり、晩年はその影響で季昌も入信した。三十六年若松基督教会員となって自らも伝道に尽力した。大正三年八月、七十二歳にて没す（妻リンは明治四十二年に既に没していた）。共に市内宝町の浄光寺に葬られた。なお、同所には、リンの石像と歌碑がある。

市制施行に尽力した最後の若松町長

通称は秀次郎、左文、郡治。陽亭と号す。父の衛門秀久が嘉永四年（一八五二）に軍事奉行とし

て江戸湾防備に赴いたため、家族もこれに従って二年のあいだ富津（千葉県）で暮らした。また、東

会津子女教育の母

嘉永二年（一八四九）日向新介、まつの子として小田垣で誕生。幼名七ト。七歳から父に手習いを学ぶ。十三歳から三年間、神尾ふさ子から裁縫、礼法、武士の女性としてのたしなみ等の修業に励んだ。慶応元年、十七歳で軍事奉行を勤める海老名家の季昌と結

婚。翌年季昌は京都常府となり、三年には徳川昭武に随行し、途中から横山主税と二人フランス等に遊学、四年帰国と共に鳥羽、伏見の戦いに参戦するも負傷、会津に戻った。この間リンは、会津で由緒ある海老名家を守った。運命の八月二十三日、季昌は家老として城に入るが、リンは、父新介の負傷の見舞にいついて遅れ入城できず、一

キリスト教に心ひかれ洗礼を受ける

これまで家庭第一の生活をすごしていたリンが大きく変わったのは、明治十九年、季昌が警視庁警部として東京に戻ってからである。その時リンは四十歳を過ぎていたが、井深樞之助一家や湯浅初子等との親交を深め、キリスト教に触れ、心ひかれて明治二十一年に洗礼を受け日曜学校の先生を務めたりした。ほぼ同じ頃、東京矯風会へ入会、熱心に活動し責任ある地位につ

き外出が多くなったリン。しかし、女は家を守るものと考え、キリスト教を嫌う季昌との間は険悪になるが、泣いて止める娘モトの姿に元を納まった。

明治二十三年、湯浅初子に替って幼稚園の経営にあたるが一年で譲り、二十四年に近藤浜幼稚園保母練習所へ入所し免許を得、警視庁を退職した季昌と若松に帰った。

当時の若松では、女子教育や幼児教育への関心は薄く、リンは、その重要性・必要性を説き、明治二十六年四月に甲賀町石垣の北に八名の園児を迎えて私立若松幼稚園を開園、評判もよく、二十七年には川原町へ分園を開くが二円の家賃や職員の給料さえ払えないほど財政的には、苦勞の連続であった。そんな中で開園時の七月には、幼稚園の片すみに女学校も開校している（会津女子高等学校の前身）三十年代に入ると、モトの結婚、夫季昌、実母まつ、娘モトが受洗するなどうれしい事もあったが、三十五年の若松大火で海老名家も焼けたりしたこともあり、気力、体力の劣えから病床に伏す日も多くなり、明治四十二年四月二十日、生涯を終えた。享年六十一歳。葬所は浄光寺、そこには教え子達の建立した銅像もある。

海老名 リン

えびな りん

嘉永2年～明治42年（1849～1909）



柴 四朗

しば しろう

嘉永5年～大正11年（1852～1922）



明治十年の西南戦争に、元家老の山川浩らの隊の別動第二旅団分隊長として参戦した。この時、弟五郎への手紙に「今日薩摩人に一矢を放たざれば、地下に対して面目なし」と、四朗の心情を伝えている。

熊本城入城で谷干城（土佐）に四朗は才能を見い出され、豊川良平を知り岩崎弥太郎の援助を受けて、二十八歳で米国、ハーバード大学・ペンシルバニア大学に留学する。在

アが欧米に侵略されている現実を憂い、政治小説『佳人の奇遇』を構想している。洋行を共にした谷干城の『洋行日記』には、ウィーン、パリ、ロンドンの記事が多く書かれているが、四朗の小説には谷があまり触れていないエジプト、ハンガリー、ポルトガル、トルコなどに記述が及ぶなどふたりの当時の世界への感心の相違は、四朗の近代日本のナショナリズムの発想をうかがい知ることができる。これはまた、四朗の会津戦争や不毛の斗南移住の苦難の経験から書かれた内容でもあった。執筆は十二年にもおよび、八編十六巻となる大作となった。

近代日本のナショナリズムの発想

藩校日新館で学び
優秀な成績を修める

房総半島警護に、富津の会津陣屋に出張中の二百八十石取り柴佐多蔵の四男として、四朗（幼名・茂四郎）は生まれる。藩校日新館で学び優秀な成績を

修め、藩主松平容保の京都守護職拜命に伴い、十五歳で京都へ赴く。鳥羽伏見の戦い、会津戦争では籠城戦に加わる。

開城後、東京にて謹慎する。赦免後も東京に残って大学南校に学ぶも学費が続かず、斗南、函館などを転々とする。

籍中、経済学・政治学などを学び、国際的な視野を養う。

政治小説『佳人の奇遇』
八編十六巻の大作を
十二年かけ執筆

とくに中国や朝鮮などの東アジ

柴佐多蔵（二百八十石）の五男。福島県人初の陸軍大将。

会津戊辰戦争を十歳で体験する。兄太一郎とともに斗南に移住し、辛酸をなめ、飢餓に耐えて上京、明治六年陸軍幼年学校に入り、陸軍士官学校へと進み、明治十二年陸軍砲兵少尉になる。明治十四年、大阪鎮台山砲兵第四大隊小隊長となる。明治十六年には近衛砲兵大隊小隊長に任じられる。明治十七年七月、参謀本部に出仕し陸軍中

尉となり、十月、清国福州・北京駐在を命じられる。明治二十一年大尉に昇進し、近衛砲兵連隊中隊長となる。

明治二十三年五月、陸軍士官学校の教官に任じられる。明治二十七年、日清戦争に出征、少佐に昇進し、大本営の参謀となる。

明治三十三年三月、柴五郎中佐は、清国公使館附を命じられ、着任間もない八月十五日義和団事件が発生する。イギリス公使（元陸軍将校）マク

Donaldの総指揮のもと、北京駐在武官の柴中佐は、各国の籠城者を激励指揮し、援軍の到来まで守りぬいた。各国に「リュウトナンコロール・シバ」と、柴五郎の存在を知らしむることとなり、欧米で広く日本人の名が知られる最初となり、欧米各国から勲章が授与される。

明治三十四年三月帰国、六月近衛師団附将官として野戦砲兵第十五連隊隊長になる。

福島県人初の陸軍大将

日露戦争に出征
功二級金鷄勲章を受勲

日露戦争に出征。明治三十九年帰国、功二級金鷄勲章を受ける。英国大使館附駐在武官になりイギリスへ、ロンドン第二回赤十字万国会議に出席など。

明治四十五年九月、重砲兵第二旅団長から第一旅団長に転任。

大正二年、従四位を授与され、八月、陸軍中将、下関要塞司令官となる。翌年第十二師団長（小倉）。九月、会津中学校で講話、その後

しばしば来校する。

大正六年九月、戊辰五十周年祭に來席。会津・面川村にて
此里のわらべとともに牛ひきぎ
稲を運びしこともありしを
と。

大正八年、陸軍大将に
親任される

大正七年東京衛戍総督となり、東伏見依仁親王の英国派遣に随行。

大正八年、陸軍大将に親任される。十一月特別大演習に参加、相手は同期の秋山好古大将。台湾軍司令官となる。大正十年五月、宮中御座所にて軍事参議官の親補式が行われる。

大正十二年、従二位となる。五月、特命検閲使の大任にて会津・斗南へ。十月、戊辰殉難者七十年祭が阿弥陀寺で催され、在京会津人代表として玉串を捧げる。この頃の会津の宿は清水屋か菩提寺恵倫寺であった。昭和五年退役。

昭和二十年、敗戦の報に接して参内。十二月十三日、戦争責任を感じて自刃を遂げた。

柴 五郎

しば ごろう

万延元年～昭和20年（1860～1945）



遠藤 敬止

えんどう けいし

嘉永4年～明治37年（1851～1904）



眠ることができない。仕方がないので、うす明かりの中で書を読み、曉に達することもしばしばであった。敬止はかねがね世の中は商業（経済）によって動いていることを感じとり、明治三（一八七〇）自由の身となつてからは、ひたすら欧米の商法や多くの経済書を読みあさつた。明治十年代に大蔵省が銀行事務講習所を開くこととなり、敬止はその講師に招かれている。その際に著したのが『銀行実験論』である。

仙台七十七銀行の頭取、 仙台商業会議所の会頭 など歴任

同十七年仙台に初めて第七十七国立銀行が設立されると、その頭取に任命され、また仙台商業会議所会頭にもなつている。同二十二年には仙台北東華学校のために二万円という大金を寄付し、その後、仙台市の収入役になること数回、ついに仙台を永住の地と定めたのである。

敬止は宮城県における多額納税者の第二位となり、東北地方でも有数の富豪であったため、財界に及ぼし

た影響も大きなものがあった。『仙台人名大辞典』には「豪奢。一世を傾倒し、久しく東北の財権を掌握し、其の毀誉相半すと雖も地方に貢献したるの功績は歿すべからず」と記している。あるいは、財力にまかせて行き過ぎた言動などもしばしばあったのであろう。

払い下げの若松城を 買い取り松平家に献納

さて、明治政府は戊辰戦争によって没収した若松城を払い下げることになった。このとき敬止が二千五百円を国に納めて買い取り、これを旧主松平家に献納したといわれている。事実、敬止の墓碑裏面の碑文にも「君又式千五百円ヲ出金シテ之ヲ購イ、以テ旧主松平容太公ニ献ス……」（原漢文）とある。が、近年そのときの領収証が公開されて話題となった。しかも金額は式千円であり、納入者が松平容大となっている。しかしこれは、資金の提供はあくまでも敬止であり、手続き上そうなったに過ぎないのであろう。

敬止は明治三十七年六月十五日、五十六歳を以て没す。仙台の充国寺に葬る。

鶴ヶ城趾保存の恩人

父の嘉内は会津藩の下級武士であつたが、詳しいことは伝えられていない。母は本名氏。

弟の嘉竜二は白虎一番奇合組として、戊辰戦争で戦死している。敬止もまた出陣して身に傷を負つたが、生命に別状はなかつた。

多くの藩士たちと共に 謹慎生活を送る

戦後、多くの藩士たちとともに芝の増上寺で謹慎生活を送つたが、ここがまたひどい所で、ろくな食事も給されない上に夜は蚊にせめられて

安政元年（一八五四）八月十四日、会津藩中級武士高嶺忠亮の長男として会津若松に生まれた。六歳の頃、祖父武兵衛（忠恕）について孝経の素読を習い、文久元年（一八六一）八歳で日新館入る。幼少より誉れ高く素読、積義の課程を優秀な成績で終え、十一歳

の時、史記、前漢書、後漢書、四書、近思録、二程治教録などの諸書を講義、白文訓点までになり、「大学校生」に進級し詩経朱註十六冊を拝領し、十四歳時は上等生に進み学校出席勝手次第という免許を受けている。開城後、東京に護送され松平図書頭

近代教育の祖

旧邸に幽居の身となる。その後、御小姓役を免じられ藩命による修学が始まる。会津藩の再興に賭ける悲願のあとが窺える。明治二年（一八六九）新発田藩士大野俊次郎の塾に入り漢学を修める。明治三年、藩命により湯島天神下の福地源一郎の日新舎で英学を学ぶ。明治四年、日本橋の津山藩邸内で英学を学ぶ。同年三田の慶応義塾に入學。この年は廃藩置県が断行され文部省が設置された。やがて同塾の教員に推挙され童子局の幹事にも選ばれた。明治八年（一八七五）七月、ニューヨーク州オスウェゴ師範学校に留学。明治十一年（一八七八）帰国。

五月付で東京師範学校雇を命じられ教員兼教場幹事として勤める。

東京大学校長 兼教授に就任 様々な教育改革 に着手

明治十四年（一八八一）、東京大学校長兼教授に就任、教授法の改革、教則改正を実施する。明治十八年（一八八五）内閣

制度が発足。翌年三月、陸軍省総務局制規課長陸軍歩兵大佐、山川浩が校長に、高嶺は教頭に命じられる。諸学校令と共に師範学校令が發布される。師範学校を高等と尋常の二つに分け高等学校は文部大臣の管理とし東京に一校置き、尋常師範学校は各府県に一校を置いた。この教育令で東京師範学校は高等師範学校と改称され、その卒業生は尋常師範学校長及び教員に任じることが本体となり、場合により各種の学校長及び教員に任じられる。明治二十四年（一八八七）八月、山川浩校長が退職すると高嶺が校長兼教授に任じられる。高嶺は教師の資質、有り方、何よりも教師自身の学究的姿勢、熱情こそが大前提であると演説で強調している。明治三十二年（一八九五）二月、新たに技芸科を増設して従来の文科、理学と並立させた。

明治三十九年（一九〇二）四月、家事科の課程に洗濯、染色の実習を加え女性に具体的な特技を教授指導し女性の能力発揮の場として家事科の充実を計ったことは画期的な業績である。東京美術学校校長、東京音楽学校校長を歴任した。

明治四十三年（一九一〇）二月二十一日死去、五十七歳。

高嶺 秀夫

たかみね ひでお

安政元年～明治43年（1854～1910）



新城 新蔵

しんじょう しんぞう

明治6年～昭和13年（1873～1938）



宇宙物理学の先駆者

学に学ぶ。翌々年帰朝し京都帝国大学理工科大学教授に就任し、理学博士の学位を受ける。

大正七年、京都帝国大学に宇宙物理学講座が新設され、その初代主任教授となる。この頃、広島高等師範学校から新設の京都帝国大学の宇宙物理学教室へ、転科について相談するために訪れた。荒木俊馬は新城教授に初対面したときの印象を次のように述べている。

天文学者と言うからには、恐らく鶴のように瘦せた方かと思っていた。応接間で正座して待っていると、ミシミシと階段を上がって来る足音に極度に緊張していた。痩せてはいなかった。堂々とした恰幅、久留米がすりの着物姿、端座して「新城です」と丁寧な挨拶だった。顔に入江の中の半島のような黒い髪の毛を残し、八の字髭を貯えていた。声は大変優しく、「宇宙物理学をやりたいと言うのでしたね」と言い、口数は少なかった。質問に対して短い、要点を押えて誠実に答えられた。若い一学徒の将来への思いやりに満ちた口調に、私はこの方を師事す

る人なのだと感じ、この先生について一生天文学をやって行こうと、決心するに十分な一時間であった。

天文各分野で数々の実績、優秀な物理学者輩出の礎

大正十二年（一九二二）に理学部長となり、正常な星の大気理論的モデルの研究、太陽のコロナや探層の研究、地球の電離層など天文の各分野における研究などで実績をあげ、後に湯川秀樹博士等の優秀な物理学者を輩出する基礎をつくった。なお、大正八年に妻の「わか」を肺結核で亡くしている。

昭和四年（一九二九）から同八年まで、京都帝国大学総長に推されて就任している。退任後、昭和十年に上海自然科学研究所長となり中国に渡った。この間、中国古代暦法の分析を基にして、漢籍に見える天文現象を抽出して歴史事件の年代を推定する、という「年代学」の科学的基礎を築いた。

昭和十三年八月一日、南京において殉職する。享年六十六歳。正二位に叙し、旭日大綬章を賜る。

明治十七年若松中学校が廃され、県内では福島中学校（今の郡山市安積高等学校）だけだったので、ここに移り十二歳の時、ここでも秀才ぶりを発揮し、明治二十年（一八八七）三月十五歳の時すばらしい成績で卒業している。さらに同年十二月、仙台の第二高等学校（現東北大学）が新設されると、この予科に入学し、第一回の卒業生となった。

新城新蔵は明治六年八月二十日、酒造業を営む八代目新城平右衛門の六男として、赤井町で生れた。幼少の頃から、「新城の神童」と言われ、母タツはしっかりと育てて評判が高かった。特に躰は厳しく『弱い者や女をいじめるのは、卑怯者のすることだからそんな行いをしてはいけない』と常に言い聞かせていたと言いつ。

栄町一番小学校（現鶴城小学校）この時から若松中学校を修業する迄、躍進した躍進で半年毎に進級し、当時は新城新蔵と言うよりも新城の神童で通っていた。

岩越鉄道を実現させ、福島県知事から外国大使に

父は侍医の石田龍玄・母はちろ。坂下・開津出身の父は文久元年に若松で開業する。

幼名五助は、十四歳で藩校日新館に入学、十六歳で終了するほど

の秀才にて、慶応三年上京。慶応四年正月、鳥羽伏見の戦いに参戦するも、重傷を受け江戸で治療。治癒すると、大鳥圭介・榎本武揚らと箱館へ。師の安部井政治とともに戦い、敗戦、新政府軍にとらわれ、東京・芝増上寺に収容される。（自刃した白虎隊士の石田和助は実弟）

後に井上馨の書生となる。日下義雄に改姓し、大阪英語学校に入学する。

明治四年、太政官の正院から岩倉欧米使節団に同行し米国留学に命じられ、ロンドンでは経済学を学ぶ。帰国後官界へ、内務省に入る。二十六歳の時、議官井上馨の随員として欧州へ派遣される。三十一歳で太政官権大書記官。明治十七年、従五位に叙せられる。明治十九年、三十六歳で長崎県知事になる。

明治二十五年八月、第七代・福島県知事に任命される。就任中、とくに岩越鉄道計画の請願委員を指導し、民間会社の事業として資本金調達に中央政財界の支援を要請し、明治二十七年、岩越鉄道施設会社の設立が許可される。東北線から若松への路線決定については、白河への接続を主張する山川浩と論争になり、現在の猪苗代湖北廻りの郡山から若松への路線を日下知事が有利として確定する。

明治二十八年、弁理公使（外国大使）に栄転し、福島県を離れ東京築地の自宅にもどる。その後、株式会社第一銀行監査役、愛国生命株式会社監査役となる。従四位叙勲。

明治三十一年、岩越鉄道株式会社取締役となる。明治三十三年十二月妻・静子が三十九歳で亡くなる。明治三十四年、京釜鉄道株式会社常務取締役となる。衆議院議員選挙に立候補し、三十五年と大正元年の二回に当選する。東京統計協会評議員、朝鮮興業株式会社取締役となる。淀橋町角筈へ転居。

明治四十一年六月、会津若松市に旅行する。以後、度々帰郷するようになる。

明治四十三年五月から汽船日本丸にて欧米漫遊の旅に出かけ、翌年四月帰国。

大正元年、東邦火災保険株式会社専務取締役社長となるなど事業活動に旺盛で、大正六年八月二十三日の会津若松市主催の明治維新五十周年祭に参列する。亡くなる前年にも病をおして会津に赴き、郷愁を忘れないようにしていたのである。

鉄道開通にかけた一生

日下 義雄

くさか よしお

嘉永3年～大正12年（1851～1924）



松江 豊寿

まつえ とよひさ

明治5年～昭和31年（1872～1956）



板東俘虜収容所長 第九代若松市長

戊辰戦争の時、松江豊寿の父久平は二十六才、朱雀隊（約千二百人）に属し越後方面を転戦した。敗戦後、江戸や上越高田の捕虜収容所に約五千五百人以上が護送された。翌、明治二年（一八六九）下北半島の斗南藩を強制的に与えられ蝦夷地を含み一万七千三百二十七人が罰罪のない罪で流罪となった。久平が結

婚したのは明治三年（一八七〇）十月、本郷要作の娘ノブ、弘化四年（一八四七）の生まれ二十三歳。長男として豊寿が生まれたのは明治五年（一八七二）六月六日、弟春次は明治九年（一八七六）に生れた。会津若松の住まいは馬場下五之町、高厳寺の借家である。明治十年（一八七七）豊寿が五歳の時、西南戦争が起こっ

た。警視庁の佐川官兵衛の出陣が決まると父久平は抜刀隊に応募した。警視局巡査を拝命し四月十日長崎に到着した。輜重隊第五分隊として奮戦した。豊寿は明治二十二年（一八八九）十六歳で陸軍幼年学校に入学した。明治二十五年（一八九二）卒業、同年、陸軍士官学校（東京市ケ谷）に入学した。明治二十七年（一九〇四）卒業、少尉になる。

俘虜収容所の所長として 敗者への思いやり忘れず 俘虜を人道的に扱う

同年、日清日露戦争が勃発した。松江豊寿は明治二十八年（一八九五）出兵。明治三十年（一九〇七）には歩兵大尉、明治三十七年（一九〇四）日露戦争では第十二師団の副官として作戦を遂行した。大正三年（一九一四）六月二十八日、オーストリア・ハンガリー帝国の皇位継承者暗殺。オーストリアはセルビアに宣戦布告した。イギリスは日本と同盟関係にあり中国山東半島膠州湾に駐留していたドイツ艦隊に攻撃を要請し、同時にドイツに宣戦布告した。同年九月二日、山東省に上陸。十一月七日に青島を占領し戦いは終る。

投降したドイツ兵は約五千人、大正六年（一九一七）陸軍大佐、坂東俘虜収容所の所長となる。松江所長は国際条約を守り、俘虜の精神を尊重し、人道的な立場で接した。会津武士道を貫き敗者への思いやりを忘れなかった。「ドイツ兵は捕虜ではない。祖国の為に精一杯戦った」と口癖の様に語っていた。

陸軍を退職後、五十一歳で 会津若松市長に就任

大正十一年（一九二二）陸軍を退職して同年十二月二十七日、五十一歳で九代会津若松市長に就任、翌年十二月五日の市制二十五周年を祝い記念式典を挙行した。大正十三年（一九二四）戸ノ口用水から一箕村八幡に上水道を建設した。財団法人弔霊義会専務理事に就任、飯盛山の整備に努めた。大正十四年、任期一年余り残して市長を辞職。晩年は東京で暮らし、昭和三十年（一九五五）五月に二十一日、八十二歳で永眠した。



姉妹都市と親善交流都市

会津若松市は、戊辰戦争をはじめとするさまざまな歴史的なつながりを通してゆかりの都市と結びつきを深めてきた。昭和59年（1984）には、戊辰戦後の旧会津藩が移封して斗南藩が置かれた青森県むつ市と姉妹都市の盟約を結んだ。

以降、親善交流都市として徳島県鳴門市（平成11年）、長野県伊那市（平成12年）、北海道余市町（平成27年）の三都市と会津若松市が結ばれ、さらに友好都市として神奈川県横須賀市（平成17年）との間に提携を結んでいる。このほか蒲生氏郷公ゆかりネットワーク共同宣言を滋賀県日野町、三重県松阪市と結び、会津藩北方警備ゆかりの地交流都市共同宣言都市として北海道稚内市、利尻富士町、利尻町がある。さらに平成24年には新潟市、京都市とそれぞれ観光交流・相互交流宣言の調印をしている。



会津大学 — 長年の悲願がここに結実

長年の懸案だった四年制の会津大学が、平成5年（1993）4月、会津若松市一箕町に開学した。全国で初めてコンピューター理工学部を持ち、いまや世界のコンピューター・サイエンス教育をリードする存在。しかし、ここまで大学誘致の道のりは長く困難なものだった。

会津に大学を—という誘致・創生運動は、昭和42年から実に26年という長きにわたった。昭和45年、民間の手による「会津に国立大学をつくる会」が発足し、全会津から15万2千人もの署名を集めたのが最初だった。その後、大学誘致をめぐる時代の流れは大きく変わりつつあった。福島県が、地元会津の活発な誘致運動を受けて「会津地域大学整備懇談会」を設置したのは昭和63年。ようやく会津に県立の4年制大学設置が本格的に動き出した。開学にあたり初代の学長には、東大情報科学科をつくった國井利泰氏を迎えた。

